

日本伝統音楽における変化

日本の伝統音楽に対する日本人の大きな誤解は、それぞれのジャンルは、一度成立すると、そのまま変化しないで伝承されてきた、というものです。そのため、「慣習を墨守した」「固定した」音楽というイメージをもたれがちです。

この度は、伝統音楽の例として「三曲」と呼ばれるジャンルを取り上げて、伝統音楽がどのように変化してきたかを、具体的な響きによって論じることになります。三曲は江戸時代に成立した日本の室内楽で、三味線、箏、尺八の三種の楽器と声の音楽です。ヨーロッパや日本国内で、日本音楽の普及に努力している日本音楽国際交流会の協力を得て、四人の演奏家に参加して頂きます。

講 師 徳 丸 吉 彦 氏

(放送大学教授, お茶の水女子大学名誉教授)

略 歴

昭和35年 東京大学文学部卒業

昭和38年 同・大学院修士課程修了

昭和38年~42年 国立音楽大学勤務

昭和42年~平成14年 お茶の水女子大学に勤務。平成9年~平成14年
大学院人間文化研究科長を兼務。また、モントリオール大学・カリフォル
ニア大学ロサンゼルス校客員教授を兼務

平成14年 放送大学教授・お茶の水女子大学名誉教授

著 書

『民族音楽学』(東洋音楽学会より田辺尚雄賞受賞)(放送大学教育振興会)

『民族音楽学理論』(放送大学教育振興会)

『三味線音楽の旋律的様相』(仏文、パリ:ペーテルス)

共 編

『岩波講座 日本の音楽・アジアの音楽』(京都音楽賞受賞)(岩波書店)

『ガーランド世界音楽大事典 東アジア』(英文、ニューヨーク:ラウトリッ
ジ)